

帰化植物雑感

セイタカアワダチソウ

高橋 務

加茂市の市街地から信濃川合流点までの間の加茂川河川敷きは、私の植物観察を楽しむ散歩道の一つである。

加茂川は、粟ヶ岳を水源とし山地に谷底平野を形成し、谷口に発達した加茂市街地を貫流して平野部に出て信濃川に合流する。

1967年と1969年の二度の集中豪雨による水害後、大規模な河川改修工事が行われ、市街地から信濃川合流までの間は、河幅は拡張され流水域の拡幅と兩岸に幅広い高水敷がもうけられた。

流量は、上流のダムで水道用水として取水されるので普段は少なく、下流域では流水域に土砂が堆積し実際の水が流れているのは河幅の2~3割程度のところもある。土砂の堆積したところには、ガマ、マコモ、ミゾソバ、チクゴスズメノヒエが群生している。

河岸堤防外斜面と高水敷は、工事が終了した後一年生草本から多年生の高茎草本に移っておりヨシ、オギ、ススキなどが広範囲に優占した群落になり、近年はセイタカアワダチソウが目立って多くなっている。

加茂川下流域にチクゴスズメノヒエ、セイタカアワダチソウが目立つのは、土地の改変で植生が乱された後に、帰化植物が優占する典型的な例であろう。

セイタカアワダチソウは、北アメリカ北東部の原産で、明治中期に園芸植物として持ちこんだものが逸出したものといわれる。その後、爆発的に殖えたのは九州の炭坑地帯であったという。

炭坑のボタ山は、石炭と共に掘り出された土の堆積で、炭坑が活況であった時代は植物が生える間もなかったが、炭坑が閉鎖されるようになって、1950年代から1960年代には、ボタ山にセイタカアワダチソウなどの帰化植物がおおむらくなり、セイタカアワダチソウを「閉山草」といったという。

セイタカアワダチソウは、その後、全国的に分布を広げていった。

セイタカアワダチソウは、空き地などに侵入すると短期間に在来の種を押し退けて占拠してしまう。粗剛な丈高い草の姿に、晩秋の頃には単一の黄色い花で覆ってしまう様子は、従来の日本の秋の景色にないものだし、日本人好みなものではない。さらに、花粉アレルギーの原因になると疑われもして、帰化植物としての嫌われる代表種となってしまう。

花粉症の原因という疑いは晴れたようだが、化学物質で

在来種を押し退けて繁殖する他感作用（アレロパシー）、人間生活の拡大による都市化による生態系の破壊、開発による野生生物の減少と帰化生物の増加などの代表種としてセイタカアワダチソウはよく知られるようになった。

セイタカアワダチソウは、日本では短時に公害植物として有名になったが、原産地の北アメリカでは、種類も多く幾つかの州の州花にもなっていて親しみを持たれているという。

1994年晩秋に山陰地方を旅行した。季節はセイタカアワダチソウの開花期でもあったので、JR山陰線の車中から、鳥取、島根、山口の各県の日本海に沿う風景に、都市周辺の線路土手や鉄橋下の川原を黄色一色に埋めつくしている所がみられるかと思っただけだったが、意外なことに、そうした群生地は見られず、ススキに入り交じって散生しているのが見られるだけであった、ややぼうけたススキの白い穂に黄色の花のまじえて風になびいているのは深まり行く秋のおだやかな風景であった。

セイタカアワダチソウは新たな土地に侵入すると在来種を他感作用によって駆逐して我がもの顔に優占するようになる、そして、その土地を覆いつくして群生するようになると自ら作り出した化学物質によって生育が妨げられて、次第に在来のススキなどが混成するようになるという。戦後、福岡県に侵入したのが南下北上して分布を広げていったということからすれば、山陰地方はすでに繁殖の最盛期を過ぎていて、ススキと共存する安定期になったのであろうか、その様に考えると最初の侵入地福岡県の現状を見てみたいと思う。

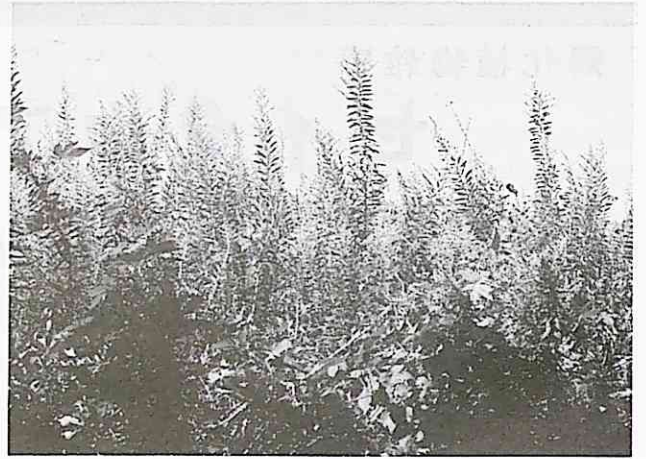
近年、加茂川河岸のセイタカアワダチソウは、1977-1978年の観察では1個所記録されているだけであるが、1887-1988年には増えているのが見られ、その後の増えかたは著しく、現在は、最盛期に達しているように思われる。

今後、加茂川下流域の河岸堤防や河川敷の植物群落が教科書的な遷移をするとしたら次第にススキなど外来種が勢力を盛り返して安定した植物群落になるであろう。

いつの日か春はやわらかな緑が萌え、夏には緑濃い草叢にヨシキリが囀り、秋にススキ、オギ、ヨシの白い穂にセイタカアワダチソウの黄色い花が適度に入り交じり、ところどころにオニグルミやヤナギ類の河畔林のある穏やかな河辺の風景がみられるようになるだろうか。

尚、付記すれば、加茂川下流域においては、市街地に近

くて人間管理下にあるので、自然なままの遷移とはならないであろうが、河岸堤防・河川敷の帰化植物セイタカアワダチソウは次第に減少していくかもしれないが、流水域の帰化植物チクゴスズメノヒエは、ますます増殖して、流水を妨げ、土砂塵埃を停滞させる害草として問題となると思われる。
(1995. 12月記)



県内各地の河川沿いに繁茂するセイタカアワダチソウ
(阿賀野川沿い 1996. 9. 22)

古木情報3 サワグルミの巨木

地上 120cmで幹周 635cm (奈良場正一氏測定) で県内では巨木であろう。
川沿いから5mほど離れて斜面に生育し、樹勢良好である。

南魚沼郡湯沢町大島外ノ川 1140m [Aug. 7, 1996]

